

# 随想



## 環境の保全に 思うこと

四宮知郎

私はここ十年ばかり、二月十一日の祭日には、きまってお水市にツルを見に行っている。ツルは夫婦仲睦しい、親子愛の深い鳥、産卵は二個で、雌雄交代で温める。一族でも一卵となっても、警戒心の強いこと、規律統制の厳しいこと、人間以上かも知れない。今冬は北海道へ出かけて、山崎定治郎翁の畑で野性のタンチョウを二日間観察した。この鳥は留鳥で、年間いつも道内に住みついて居り、春から秋まで濃厚で、ヒナを育て、冬は昼間農家の畑のえ付けに群がって

来る。ここでは五十メートルまで近づいて望遠写真撮影が可能であるが、夜はまた湿原に帰り、見張りを立てて二百メートル以内で近づけないことだ。タカ、ワシや野犬の襲撃にも、一卵となつて立ち向うので心配はない。きれいな好きで、ドジョウなども洗って食べるので大きな中毒はなかったが、最近の水銀やクロムなどの毒物混入は、味も臭も感じられないため甚だ危険だ。北陸のトキは、こうした中毒で既に絶滅に近い。北海道のタンチョウは現在二百羽余生棲とすることであるが、これはまさに日本の鳥である。清く秀でた姿、富士の霊峰の如く、気高く優れた日本を象徴する姿である。

なお渡り鳥としてシベリヤに居るタンチョウも僅少と大きく、まさに絶滅に近い生物である。これを保護するには食餌の管理が第一であるが、野鳥のこととて、それが困難、道内全域でこれをとるらしいが、近く釧路市には製紙などの大工場あり、ますます拡大されつつあり、従来排出した公害毒だけでも、水俣湾の様に堆積していると推測される。以前に無関心に廃棄した毒物が、いま如実に被害を発生している例は何処にもある。

先日熊本県北の河川の汚濁調査に県の水質専門委員の人々と同行した。この地は平坦でこう配が少なく、流はゆるく停滞している。以前は、ハエやフナ釣の好適地であったが、今は黒く臭い泥がたま

り、生物の絶無な箇所もある。この川で時々多数の魚が死ぬと、すぐ工場排水の毒物と騒ぐが、工場も最近では近代的処理をしているので、病院排水や下水だとも論議される。比較的きれいな上流のせきを切ると、そこに居た魚が急に酸素量の少ない域へ追い込まれて窒息するケースも多いと思う。

「魚は水があればよい」と簡単に考えている人が多いが、洪水の際など、「魚が溺れる」こともあるものだ。

近頃は毒物に神経過敏となつて、いろいろの環境変化で、既存生物が死に、新生物が代る例は多い。沿岸漁業が不振となつて、オニヒトデやウミヘビがふえ、カササギやホタルが減りカラサヤドブネズミが増加する。サクラ、アカマツが枯れ、外来のセイタカアワダチソウなどが目立つ。環境が悪化すれば、従来の美しいが弱い生物は滅んで、悪環境にも強い怪物が現われはこびる。

人が地球上で快適な生活をおくるためには、農作は豊産、工業は隆盛でなければならぬが、必ずこれに伴う公害に注意を怠つてはならない。生産利得と派生被害の間には関連があり、いかにすれば被害を少く利得を大に出来るか。従来利得だけを考へては行けない。

更に進んで考へることは、人は各自の利益だけを追求していることである。また人類の繁栄のために、他の生物を勝手に処理している。人類だけが栄えて、地

土人口のますます殖えるとき、資源を使い尽して、忽ち人類衰退の急坂をすべり落ちる日が必ずややって来る。

(熊本大学名誉教授)

## 高千穂の野仏

古金ふみ子

絶え間のない鶯の囀り、姥百合の花の群落が放つ芳香、屋根に出ると見えた、思いがけない雪嶺の祖母山塊、うず高い乾いた落葉で迂りやすかつたつづら折の山道、朱い実かと思つた冬山の馬酔木の蕾、四季折々に、高千穂の山の思い出が浮んでくる。

夫の転勤で高千穂には二年いたが、後の一年は山を歩き回ること過ぎていった。二上山、焼山寺山、など高千穂の山々の名は有名な山の借名が多い。大和三山と同じ名の天の香山には何かあるのかと思つて登つてみたが、頂上の樹の木に注連が渡してあるだけだった。山を反対側に降りようとして、二基の石仏があるのが目についた。稚拙な、しかし卑しくはない、素朴な顔の仏像であった。台座に彫られた五十二番、五十三番という番号が私の興味を惹いた。これが高千穂の八十八ヶ所の仏像との最初の出会ひで

あつた。

麓の部落にあつた、一番の仏様の横に、天保年間に建てられた「四国八十八ヶ所供養塔」という石碑があるから、当時こころも多間に洩れぬ飢饉があつて、その犠牲者の供養のために建てられたものだろうか。多くの人に尋ねてみたが、何の文獻も言い伝へも残ってはいなかった。今は全くと言っていい程、この仏様達は土地の人々に忘れられた存在のようだった。めつたに人の通らぬ山道は蜘蛛の巣だらけで、遍路の杖は蜘蛛の巣を払うために必須であった。蜘蛛の巣は仏様の肩の上にも濃く張っていた。

石仏は登り口から番号順に幾体か並んでいるかと思うと、ふっと途絶えて、番号は離れた山の石仏に飛び、何度歩いてもどの様な意図で配置されたのか見当がつかなかった。七、八百メートルの山々ばかりだけれど、石仏は順序よく並んでいる訳ではないので、一日で全部を回ることなど到底不可能な事に思われた。

屋根に並ぶ仏様は、町を守護するように皆一様に町の方を向いて置かれてあつた。何本かの道が登りつめる峠には、四、五体の仏様が僅かな平地をとり囲んで立っていた。ある時は下山の道を開き、その間違えた道で初めての仏様達を発見したこともあつた。

それは本当に宝探しに似ていた。何度も知らずに通り過ぎていた三メートル程の岩壁の上や、道から一寸離れた、眺望

のきく断崖の上などに、よく仏様は居られた。そしてそこには又、風雪が長い間に剪定した、見事な枝ぶりの松が生えていたりした。仏様は薬師如来が一番多く、昔の人は病苦が一番悩まされたのだと思う。受験地獄もない時代のこと、文殊菩薩は三十一番たった一体であつた。

仏様に私が供えた干菓子、その次いくまで残っていたためにはなかつた。小鳥か獣が食べにくるのであろう。

長い間探しあぐねていた、一連の仏様達の在処を教えてくれたのは、山道で珍しく出逢つた焚火拾いのお婆さんであつた。その日やつと私の仏様探しは成就した。狸畏にかかりそうな夕暮の道を急ぎながら、深い満足感が私を包んでいた。

(主婦)

## 自転車文明論

石津 治

ヨイショ、ヨイショ、坂を登るにつれてペダルはますます重くなる。ナニクソ、もう少し、何とか登りきつてホツとする。

NHK九州本部のある千葉城は、その昔、宮本武蔵が居を構えていたところ

で、今も敷地内に「武蔵の井戸」が残っている。県立図書館前からの「武蔵の井戸」に至る坂道はツツジの名所として広く親しまれているが、この坂道、距離は短い、なかなかの急勾配である。新聞配達や牛乳配達の人たちも大抵自転車を押して登る。という訳で、坂を一気に登れるかどうかは「足の健康度と若さのパロメーター」と相成る次第である。

熊本に転動して来たのは、昭和四十五年の秋、前任地の大阪、東京に比べると、緑は豊か、水は美味、その上車の少ないのが有難かつた。しかも阿蘇、天草と手近かなところに魅力的な観光地が多い。

熊本のよさを満喫するために、着任早々、十数年ぶりにマイカー族の仲間入りを決意したものである。ところが、弱いくせに好きなアルコールと、万年手許不如意が原因で「ガソリン消費は一つだけ」という大蔵大臣(?)の決定であえずなくダウン。ために我が家のマイカーは、自転車一台のみである。この自転車も、五年も使い古した坊主の愛車が使えなくなった時は、それなら親子兼用で使える物をというケチな根性で買入れた代物、サドルが上下するミニサイクルである。何しろ所有権は、子供にある訳だから、親父が使うのは至って肩身が狭い。休みの日、おそるおそるお伺いをたて、許可をもらつて街に出る。できるだけ細い裏道をたどる。家のある大江渡鹿

からお城まで、大通りは、毎日のバス通勤で見慣れているが、裏道は、目新しいものがいろいろある。新屋敷のいかにも古い熊本を思わせる家並、緑の多い庭に丹精こめて作られた花、その花の色に季節の移り変わりを感ずる。バスのように時間に縛られもせず、自動車のように駐車場探しに悩まされることもない。その上、日頃足を使って汗を流すことのない身には、心地よくクレーションにもなる。

熊本の町を三年前に比べると、自動車の伸びは著しい。排気ガスもふえた。

このままでは、余り広くない熊本の道路はパンクしそうでである。そこで一つの提案として自動車の地位の象徴であり、都市の車の数は文明度のパロメーターであった。しかしそれは過去のこと、現代の文明の尺度は、自転車党員の数にきり換えるべきである。そして勤務地から五キロ以内に居住する人は、すべからず、より高度な文明人となるために、マイカーを処分し、自転車党になるべきである。

我が愛車のペダルは敏感である。酒酔いの日は坂が長く急になり、快眠の朝は軽やかに登る。「若さへの挑戦」登坂行は、且下楽しみの一つである。

(前NHK九州本部)